歴史から見る宇津ノ谷

宇津ノ谷峠は東海道の難所でした。現在、ここには深い山をさまざまなルートで貫く6本の道があります。古代〜中世の「蔦の細道」、近世の「東海道」、そして明治、大正、昭和、平成の各トンネルです。「蔦の細道」は『伊勢物語』に因んで名付けられた山道で、江戸時代の芸術の源泉となった場所でした。「東海道」は豊臣秀吉が開いたルートといわれ、集落の中には、その故事を伝える「御羽織屋」があります。明治トンネルの上を通っている「東海道」は、国の史跡に指定されています。

俵屋宗達筆《蔦の細道図屏風》
相国寺蔵
江戸前期に描かれたこの屏風には蔦の葉が描かれており、この絵をもとに、右の深江芦舟の屏風も描かれました。

深江芦舟筆《蔦の細道図屏風》
画像提供：東京国立博物館

蔦の細道

秀吉の陣羽織

明治トンネル

『伊勢物語』から展開した文学・美術

行き行きて駿河の国にいたりぬ。宇津の山にいたりて、わが入らむとする道はいと暗う細きに、つたかえでは茂り、物心ぼそく、すずろなるめを見ることと思ふに、修行者あひたり。「かかる道はいかでかいまする」といふを見れば、見し人なりけり。京に、その人の御もとにとて、文書きてつく。
駿河なる　宇つの山辺の　うつつにも　夢にも人に逢はぬなりけり

これは平安時代の歌物語『伊勢物語』東下りの一節です。和歌は在原業平が詠んだもので、新古今集にも収載されています。東国に下る男が、蔦、楓の茂る深い山道で偶然に出会った知人に託して都の女に贈った歌でした。「うつのやま」は歌枕として知られることになり、「蔦の細道」の名もここから生まれました。この物語をもとにして、多くの「うつのやま」の和歌が詠まれ、さらに絵画や歌舞伎の題材ともなったのです。

江戸時代初期の俵屋宗達による「蔦の細道図屏風」(相国寺蔵、重要文化財)には、金地に流麗な線で様式化された山と蔦の葉が描かれ、能書家として知られた烏丸光広の賛が書かれています。また、宗達の流れを汲む尾形光琳に師事した深江芦舟による同名の屏風(東京国立博物館蔵、重要文化財)には、紅葉した蔦の間で業平と従者、そして荷物を担いだ修行者が出会う『伊勢物語』の場面が描かれています。

蔦の細道

「蔦の細道」は、平安時代から室町時代後期まで使用された官道でした。宇津ノ谷入口バス停横の平橋から南側に折れて細道を上り、猫石、釣り鐘石、神平を越えて藤枝市岡部町坂下の鼻取り地蔵へ出るコースです。「蔦の細道」と呼ばれるようになったのは江戸時代からですが、『伊勢物語』に描かれて以降、名所として全国的にその名を知られていきました。

秀吉と陣羽織

宇津ノ谷集落の中ほどに「御羽織屋」と呼ばれる家があります。この屋号は豊臣秀吉から与えられた陣羽織が、この家に伝わることから付けられました。天正18(1590)年、豊臣秀吉が北条氏直らを攻める小田原征伐へ向かうときのことです。徳川家康の家臣、松平家忠の日記には「秀吉が宇津ノ谷に到着したとき、この処の郷民が勝栗と馬の沓を捧げて秀吉の小田原東征が縁起の良いことを告げると、秀吉は彼の志しを喜び自ら着用していた胴服(陣羽織)と黄金を与えた」とあります。「御羽織屋」には、この後にも徳川家康から拝領した茶碗などが伝わり、今でも拝観することができます。
(『東海道宇津ノ谷峠　道に咲いた文化』建設省静岡国道工事事務所、1993)

明治トンネル

宇津ノ谷集落からしばらく登って行くと明治トンネルとよばれるトンネルがあります。レンガ造で全長203m、明治37(1904)年に完成しました。アーチ形の入口上部には「宇津谷隧道」とプレートが掲げられ、内部まですべてレンガでつくられています。よく見るとレンガは下部と上部では色が違い、下部には硬く焼きしめられたレンガが使われています。ここには明治9(1876)年に最初のトンネルがつくられましたが、これが火災で崩落し、現在のトンネルはそれを修築したものです。トンネルの開通によって、昔から難所であった宇津ノ谷の交通事情は大きく変貌し、馬車や人力車が行き交いました。「明治宇津ノ谷隧道」は国の登録有形文化財となっています。